

LTEタブレットで実現する、 双方向型の授業と学校の枠を越える学び

⇒ 宇和島東高等学校

目的

- SSHやアクティブラーニング推進拠点校として、多様な学びに対応できるツールを整えたい
- 県立高校のBYOD化を前に、教員や生徒がICTの活用慣れるための環境が欲しい

アプローチ

- フィールドワークを前提とした機種、ネットワーク、アプリの選定
- 機種を統一したタブレットを学習用として学校で用意
- 予算ねん出のため教務課、事務課、PTAなど学校一体の推進体制

「学校の枠」を越えた学び、LTEタブレットで実現させる

宇和島東高等学校は、2019年度よりタブレットを導入し、本格的に教育現場でのICT活用をスタートしました。生徒たちの学びが学校の枠を越えて、外の世界へと広がりはじめたことからLTEを選択し、どこでも学べる環境を整備。従来の一斉授業から双方向型の授業を実現するためのツールとして活かされています。

教育者と学校の事務局が連携し、タブレット導入を実現。 LTEの通信料を保護者負担で

同校が、最初にタブレットを導入したのは2017年。SSHやアクティブラーニングの学習で活用するために、Wi-Fiのタブレットを10台導入しました。高野昌志教頭はICTの取組みについて「さまざまな教育活動でICT活用を進めていくうちに、有効性が見えてきました。幸い、本校は事務長がICTに詳しくだったので、学校の事務側と教育側が連携しながら進めました」と述べています。一般的に、事務局が学校のICT環境整備にかかわるのは稀なケースですが、宇和島東高校では事務長の藤原二朗氏を中心に、タブレット導入を進めたことがひとつの特徴となっています。



藤原二朗 事務長 高野昌志 教頭

藤原氏は、生徒たちの学びが校内に止まらずフィールドワークや県外の大学・企業への訪問など、学校外に広がっていたことから、2019年度に実施したタブレット導入ではLTEを選択。LTEの通信費については、もともと保護者が負担していた学校内の空調費を県がサポートしてくれるようになったことから、その分を通信費に充てるよう保護者に理解を得たといいます。藤原氏は「校内、学校外のどこでもつながるLTEはこれからの学習に必要です。価格、信頼性、通信環境など総合的に判断してドコモに決めました」と語ってくれました。



宇和島東高等学校

〒798-0066 愛媛県宇和島市文京町1-1

URL: <https://uwajimahigashi-h.esnet.ed.jp/>

愛媛県立宇和島東高等学校（愛媛県宇和島市/以下、宇和島東高校）は、春の選抜甲子園大会で優勝経験のある野球部をはじめ、全国大会出場の実績をもつ部活動が多く、また、スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）やアクティブラーニング推進拠点校に指定されるなど文武両道の進学校として特色ある教育活動を実践されています。



[取材協力] 宇和島東高等学校

生徒たちからも好評、アイデアを発信しやすい環境へ

意見を共有し合う、ICTならではのグループ学習

宇和島東高校では、計123台のLTEタブレットが稼働し、導入から半年ほど経過しました。生徒へのアンケート調査やグループ学習の際に活用するなど取組みが広がっています。

1年理科の授業では、「地域の防災」をテーマにした課題解決型学習で活用。一人1台のタブレットを使用し、自宅周辺の地形的特徴や災害発生時の課題をネット上で調べ、授業支援ツールを用いて班員同士で情報交換をしながら災害対策に関する改善点をまとめ発表。また、2年現代社会の授業では一人1台で使用し、労働雇用に関する法律を学ぶためアルバイトのシフトづくりに挑戦。「授業支援ツール」で**生徒同士がアイデアを共有しながら労使双方（アルバイト、店長）の立場になって法律や労働条件等を考慮し、シフトを組み上げるなど活用が広がっています。**



松崎安紀 教諭



ワークシートを配信し、リアルタイムで生徒の意見を集約。全員参加の授業へ

現代社会を担当する松崎安紀教諭はタブレットを活用する授業について「今までは小さなホワイトボードをグループごとに配って意見を書き込み、黒板に貼り共有していましたが、**タブレットでワークシートを配信し、全員の意見をリアルタイムで集約し共有できるのがメリットです**」と述べています。生徒たちからの意見も好評で「**他の人の意見を見ることができ、みんなが同じように発言する機会をもらえるので平等だと感じます**」や「**スライドで発表する機会が増え、伝える力が伸びたと思う**」という話を聞くことができました。

発表の機会が増えて、自分の考えが伝えられるようになってきた

発信しやすい環境から、生徒の違う一面を知ることができる

松崎教諭はこうした授業以外にも、グループ活動の際にタブレットを活用し、話し合いの動画を撮影するといいます。「授業中に教師ひとりですべてのグループを見回すことはむずかしいですが、**授業後に撮影した動画を見ることで、生徒の発言を確認し評価に活かせる**」また、「普段は静かだけど、発言の視点が面白い生徒がいたり、高校生はこんなことを考えているんだとリアルな意見を知ったり、**生徒の違う一面を知ることができます**」と松崎教諭。

また同教諭は、タブレット活用に対する生徒の変容について「**疑問をすぐに調べられるので、わからないことを放置せず意欲的になった**」と感じます。発表する機会も多いので、**自分の考えを伝えられるようになってきました**」と手応えを語ってくれました。



生徒が使うタブレットは、機種がそろっている方が使いやすい

このような宇和島東高校の取組みは、すでに他校へも広がっています。愛媛県では2019年に県立高校の全普通教室にホワイトボードと無線Wi-Fiが整備され、BYODに向けた取組みに着手。高野教頭は「BYODはひとつのスタイルとして認めつつも、**教室でICTを活用するのであれば端末の機種はそろっている方が教師たちは使いやすいです**」と語ってくれました。

藤原氏は今後について「教師の働き方改革や、生徒からの意見を集約して数値化するなどエビデンスに基づいた学校経営にタブレットを活かしていきたい」と述べています。授業を深化させる手段として、これからもICTを積極的に活用していきたい考えです。

お問い合わせ

株式会社NTTドコモ

ドコモ・コーポレートインフォメーションセンター（☎0120-808-539）
受付時間 平日午前9時～午後6時（土・日・祝日・年末年始を除く）

ドコモのホームページ 法人のお客さま
教育の場にICTを!

https://www.nttdocomo.co.jp/biz/special/education_ict/

